

こころの淵へ降りるひと

——詩人、演出家、小説家が会おう場所

宮崎 真素美

ものごとの享受は感受性が傷つくことであるとするエマニュエル・レヴィナスの指摘（「感受性が可傷性、他人への曝露、へ語ること」）たりうるのは、感受性が享受だからだ。」合田正人訳『存在の彼方へ』平11・7 講談社）は、人間存在の悲惨と歓喜とを同時に語り出すものであり、大岡信が詩を「まるで愛のようなものだ」（「詩の条件」『詩学』昭29・12）と比喩したこととも遠くない。人はものごとを知り、受けとめてゆくことをどのように表現してきたのか。身体性とも関わるその一端を、演劇や詩、小説にたずさわる幾人かの創作論に探り、架橋した。

劇団OM-2を主宰する演出家真壁茂夫は、自著『核からの視点』（平22・2 れんが書房新社）において、「へ身体そのもの」に俳優自身が『なる』ことが「演技行為」であるとし、そこへ向かうために言葉をふくめたあらゆるものを「排除」し、「捨てる」ことの必要性を繰り返す。

そこで自覚される「傷」が人間の「核」と結ばれ、「身体」の根底の場に下降すること」が「個」の確立と結ばれて、死の恐怖と「暗闇」の果たす役割の重要性に及んでいる。

対して、大岡信は詩を論ずるなかで「純粹」についての定義を、「抵抗を排除してゆくとところに生み出されるものではなく、逆に抵抗するもののすべてをつかみとり、おのが組織体の一部と化さしめるところにこそ生み出されるもの」（「純粹について」『葡萄』昭30・4）として繰り返し、非「排除」による組織化によつて、自己を苛む矛盾するものへの自覚と処し方を促す。「傷」に対しても、大岡は「征服される」、「あけひろげる」といった感覚を見せ、真壁の「排除する」、「下降する」と好対照をなしているが、重要なことは、両者の関心の在処が時を超えて一致している点にある。

真壁、大岡の対照的な表現を統合して語り出しているの

が、村上春樹である。読者が自身の作品に興味を持つのは「ボイス」の共鳴が必要である（『みみずくは黄昏に飛びたつ』平29・4 新潮社）とし、「自我レベル、地上意識レベル」での「ボイスの呼応」は「だいたいにおいて浅いもの」、「一旦地下に潜^{もぐ}って、また出てきたもの」は、「一見同じように見えても、倍音の深さが違う」と指摘する。

自身の『アンダーグラウンド』にふれて、インタビュした言葉を「僕自身の中に一回くぐらせる」、「僕自身を相手の話の中にくぐらせる」と述べているのは、真壁の「下降」と大岡の「あけひろげる」感覚に通じている。また、自身の影に滅ぼされてしまう学者を描いたアンデルセンの作品「影」にふれながら、地下で対面する自己について、「できれば目にしたくはない自己の裏側」である「影」

「影の持つ意味」『MONKEY』平29・2）と言表した点は、真壁が自己の内側へ下降して対面する「傷」と重なり、それを「自らのものとして体内に組み込まなくては」ならないとする点は、大岡の「組織化」に重なる。「影との対面」は「社会や国家」においても必要であり、「明るく輝く部分があれば、その補償として、暗い部分も必ずどこかに存在」するのであり、「影を生まない光」は「本物の光」ではないとの認識から、「影と共生していくこと」、「自身自身の内部に存在する闇をしつかり見つめ」なくてはなら

ないと説く。真壁の述べる「暗闇」の果たしてきた役割と相通ずる指摘である。

谷川俊太郎もまた、〈闇がなければ光はなかった／闇は光の母〉、〈光を孕み光を育む闇の／その愛を恐れてはならない〉（「闇は光の母」『詩の本』平21・9 集英社）と、「闇」をとらえた。そして、「詩の言葉が意識下から出てきていることが大きいんじゃないですかね。意識から出てきた詩の言葉、大体つまんないんですよ。自分でも意外な、思いがけない言葉がポコッと、まだ言葉になつてない意識の暗いところから出てきた言葉は結構強いので。」（宮崎真素美「谷川俊太郎との対話―「安らぐということ」―」『愛知県立大学日本文化学部論集』第8号 平29・3）と述べる「意識下」は、まさに村上の言う「地下」であり、真壁の言う「下降」と響く。

時をはるかに遡った明治時代、すでに木下杢太郎も「地下」に並々ならぬ愛着を持ち、自らの作品を「地下一尺集」と名付けてシリーズ化していた。祈りにも似た「地下一尺」への憧憬を「神秘を追ふの心」（自家文集「地下一尺」明34夏く40・6「序文」と記したのは、谷川が希った〈闇〉の〈愛〉と重なり合う。

真壁の述べる「排除」、「傷」、「下降」、「暗闇」は、表現者たちに共有された意識であり語彙であった。それらは身

体性を伴って語られ、相互によく響き合う。外界と内界との真摯な対話によってもたらされた、これらをめぐる厳しくも確かな感覚は、人が生きてゆくことと分かちがたく結びついてもいる。

（平成三十年十一月二十四日 於佛教大学）

付記

本講演の詳細は、「傷と感受―地下の闇から生まれるもの

―」（愛知県立大学日本文化学部論集」第10号 平31・3）にて論じている。あわせて参照いただければ幸いである。